

書 評

Kenneth R. Hall, *Maritime Trade and State Development in Early Southeast Asia*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1985. 368p.

東南アジアには豊富な資源があり、加えて交易を通じて外国との接触とがあったにもかかわらず、何故東南アジアで権力の集中が起こらなかったかということの問題意識として、著者はこの本を書いている。この設問に答えるために、著者は紀元直後から14世紀までの間に登場した国々を分析してゆく。原初期の小仲継港(第2章)、扶南(第3章)、Srivijaya(第4章)、Sailendra(第5章)、Angkor(第6、7章)、11～14世紀の諸港(第8章)、14世紀のジャワ(第9章)が中心的に討議されている。

著者は分析にあたって、地勢学的モデルを設定し、それを基準にして各国の規模と安定性を論じている(第1章)。モデルは独立した小河川が多数流れ出す海岸型(riverine system)と大きな沖積平野を持つ平野型(river alluvial system)の二つである。前者の最も典型的なものは原初期の小仲継港である。ここでは同じような条件を持つ河口集落が多数あるなかで、特定のひとつだけが中枢的な位置に育ってゆくことの難しさを指摘している。こうした状況のなかでは大きな権力の集中やその安定的存続は望みえないという。

一方、river alluvial system では港としての性格は前者のそれと同じであるが、それとは別に沖積平野上で広がるより複雑な在地の交易組織とそこでの稲作というものがあって、その権力集中はより大きく、また安定したものに育つという。この例としてSailendraやAngkorを検討している。ただし、こうしたriver alluvial system の場合においてさえ、東南アジアの王達は決して絶対的な権力の保持者ではなかったという。王は沖積平野上に多数存在した在地首長の一人にしか過ぎず、ただ、彼等を代表して地域全体の繁栄を計る司祭のような、極めて象徴的な存在にしか過ぎなかったという。

Srivijaya はこうした観点からすると、riverine system と river alluvial system の中間にあるとしている。これは沖積平野こそ持たなかったが、森林物産産地の内陸の首長達と密な関係を保っていたからだという。

14世紀のジャワになると、こうした王の性格が変わってゆく。東南アジア全体に以前よりははるかに広範に外部経済の影響が及んでくるからである。例えば、港では中国の銅銭が多量に使用されるような事態が起こってくる。そして、これに呼応するかたちで、Majapahit の王達は国内の諸組織を変えにかかる。例えば、製塩、製糖、交通関係等といった非農業セクターの在地首長からの引き離しと、それらに対する王の直接支配がすすめられる。香料貿易の承握にも力が注がれる。しかし、これらも結局は不徹底のうちに終わっている。海岸に勢力を張り出した外国勢力を押さえきれずに Majapahit は崩壊するのである。

この本に対しては歴史学者の間からは、John N. Miksic のような手きびしい批判も出ている。しかし、私のような門外漢にとっては好著に見える。東南アジアの伝統的な国家群の成立の基盤が一本の筋道の上に判り易く示されているからである。ただ、ecologist の目から見ると著者のモデルにはいささかの疑問を感じる。むしろ、モデルは perhumid と monsoonal、すなわち汀線にしか住めない世界と内陸まで侵入できる世界の違いとして対置させた方がよいのではなかろうか。

(高谷好一・東南ア研)

Gerald G. Marten, ed. *Traditional Agriculture in Southeast Asia: A Human Ecology Perspective*. Boulder and London: Westview Press, 1986. 358p.

本書は、東南アジアの伝統農業の諸側面、すなわち土地利用、営農技術、経済的機能、社会的背景等とそれら諸側面間の相互関係について分析し、伝統農業の持つ継続性、安定性のメカニズムを明らかに

するとともに、人口増加や市場経済の導入に伴う農業形態の変容を健全に行うための方策の提言をも目ざした論文集である。

著者は、アメリカ合衆国と Southeast Asian Universities Agroecosystem Network (SUAN) の研究者によって組織された East-West Center Working Group on the Human Ecology of Traditional Agroecosystems に所属する農学者、生態学者、社会科学者らである。

全体は15章から成る。まず第1章では東南アジアにおける農業の全体像が、第2章では農業生産における社会的な環境と物質的な環境を相互に関係づける視点として“human ecology”という概念が示されている。本書の各論文はこの視点に基づいて分析されたものである。そして第3章～第6章では特定の地域を対象とした、第7章～第9章では社会的環境の特定の側面を中心とした、第10章～第13章では物質的環境の特定の側面を中心とした分析が行われている。これらの大部分の論文は既往の関連する研究のレビューである。また第14章では上記の二つの環境の相互作用が「栄養」の生産と摂取に関する分析を通じて述べられている。そして第15章では東南アジア全体としての農業開発の現状と農学研究の今後のあり方に対する提言が結語として述べられている。各章は独立した論文の形態をとっているが、共通の視点と目的に基づいてまとめられている。

このように本書は、東南アジアにおける伝統農業を包括的にかつ学際的に分析した興味あるものだが、いくつかの点について不満が残る。その一つは、日本や東南アジアのように、小農が相互に干渉し合いながら同一地点で長年月、農業を営んでいる場合には、農業形態は、その地域の自然環境のみならず、社会組織や文化的伝統等の社会的環境の大きな影響を受ける。しかし本書では、“human ecology”という視点を打ち出しているにもかかわらず、社会的環境がどのように各地域の農業形態を規定しているかが明確に示されていない点である。したがって、対象地域の農業の持つ論理を明確に示すことに成功しているとは言い難い。

またもう一つの不満は、焼畑やホームガーデンにおける栽培作物の選択や、これらの農地では栽培作物が変化しているにもかかわらず水田では水稻作が

継続して行われていることに対する、経済的見地からの説明が不十分な点である。農業は、伝統的であれ自給的であれ、農民の経済活動であることに変わりはなく、かつその色彩が極めて強いことが東南アジアにおける農業の特徴ではないだろうか。

本書の最も興味をひく成果は、あるいは編者の意図とは食い違ふかもしれないが、篤農家の秀れた農耕技術の紹介である。それらは、北タイの灌漑田での耕起や施肥の技術(第4章)、東北タイの天水田の裏作としてのピーナッツ栽培(第5章)、ジャワ島のホームガーデンにおける作物選択(第14章)に見られる。このような技術に関する情報の蓄積こそ、従前オーソドックスな方法であった圃場実験と並んで、本書が目ざす農業生産力増加のための方策を検討する際に有効な示唆を与えるであろう。本書がこのような方法論での東南アジア農業開発論のスタートであることを期待している。

(河野泰之・東南ア研)

Khin Yi. *The Dobama Movement in Burma (1930-1938)*. Ithaca, New York: Southeast Asia Program, Cornell University, 1988. 140p.

ビルマの民族主義運動(特に1930年代後半)におけるタキン党(ドバマー・アスィーアヨウン:我らビルマ人協会)の役割は重要である。にもかかわらず、本格的なモノグラフが今まで登場しなかったことは意外なことであった。今回、ビルマ人の視点から同党の形成史を論じた力作が公刊されたことは、このような背景を考えると大変意義深いことであると言わねばならない。

著者のキン・イー女史は、元ラングーン文理科大(現ラングーン大)歴史学部の教官で、本書の内容は当時女史が修士論文(1970)としてまとめたものを下敷きにしている。一級の一次資料を数多く使っている本書は、タキン党の形成過程を1930年の結成時から、同党が積極的に関わった「ビルマ暦1300年の叛乱」が展開される1938年(実際は1939年前半)までにわたって、クロノロジカルにまとめあげてい